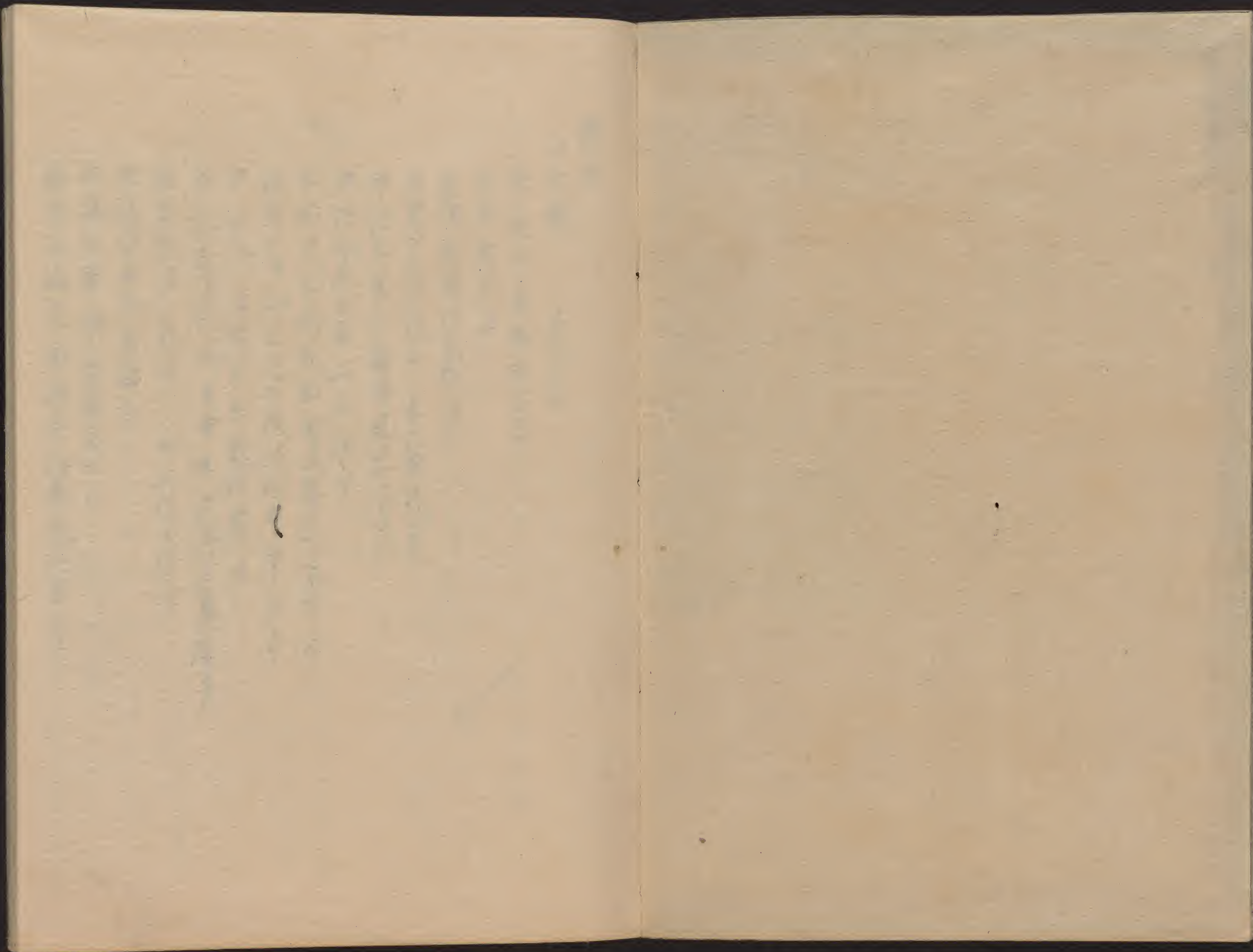


823
MRN2

紙江入楚

慕此

28



野分

元六歲

右政大臣

中文源前極秋迄

八月終

家御前欣理前

夕旁中得大風中系六條迄

中得自書戶融奉見家上

中得又系三系大文迄

末明中得系花散果次系家上取方

源氏以中得系為以彼被病中

中文源方童共出給飼病

中得系源氏御方申中文源迄奉迄

源氏系中文源中得作以迄

次渡明石御方迄

次渡玉鬘御方迄

源氏与姫忌戲給中得奉見位思

中
中
中
出
硯
紙
書
文
行
子
付
荊
莖
板
子

中於又衆三衆大文結了

内大臣衆三条文子
被申御子達之

以洞為卷石

望之

此是野分より始る論也

私財を盡いのちをうけとる

みえりくさくさ 野ふしをさるつれと 花月

去若以銅弓之

源氏枕草子八月のうゝ
豊前

申文の所あり

美秋好秘

六条院より秋好申文のいふすふも

又英紙に

先
乃
此
集
同

卷之四

うわらふのせ

美架てせ

ふれをきつるはわるといふなり

波々々といふは波のなりけり糸糸といふり唐糸ハ此
糸祕同

風流の心
能國を枕する世にあらんとて

夕涼のいりこ

以速伊勝
人あそく思ふふ先ゆふ花あけ
年とるてや病もとふん

[illegible]

義
秘林堅却つてぬるを

源
か
ま
り

美
是ハ暖
平ハ公
之ハ
親

長秋のわさひよ

若菜少少也

策
万策才一色
江大津文卿
宁夏天竺
石内大长
荻原朝长
大祿冠

競懷善心，乃救秋山千累之款時。

額田以奇判之奇

之拓成書之

名^ナ 咄^{ハナ} 多^タ 才^{サイ} 情^{セイ} 乃^ノ 名^ナ 用^{ヨウ} 必^ヒ 才^{サイ} 情^{セイ} 乃^ノ

今更に其源よりて是を其の本風と爲す

英夢をいれてそよふ風をいとおぼしてそよげくそよ眼秋ふれハ
樹下集ハふれこより 大徳正堂の論議のう

面白くしてうれとて紙々うれをきと秋ふれいつとそよふれを
きかして花してうれをきとて秋ふれいつとそよふれをき

不捨達才九わふれふれ秋いつれうううとてうれをき

ふれ秋ふれいつれうううとてうれをき

ふれ元良親王兼香殿のうううふれ秋いつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

うれ秋ふれいつれうううとてうれをき

於
 又とあつるを中の人をむふそけは
 春秋ふひふしてとさうのつむふつるを
 以二首に海のりふと箋

私心ふちつゝさしてわりとこゝろのきふひひゝふふ
かりひちゝけりおちたへ

あれは雨らんつてみて
申ふは花ゆふうく星ほのめを（祝）
雨あそひなうとあゆみと花は八州の最前防の雨あそひ

先坊の所忌月ありてむと申すなり

河
孝謙天皇 寶龜元八月^ニ崩^ス 朱薙法皇 天曆六年八月十八日崩

野分まゝのうらうら

暴風

野分

八月ハ必大風吹てあつた北風吹てうらやまける候ふれ奇特としやふれ
葉なるを明蝶ふと取てわが紙をうへへの遠きあへて
やうあてハ思ひとあてしなふて紙は堅かゝて秋のふとあて
なうあてるか紙と物てして天ははをそとへふとあてて



乙未秋八月秋高風怒號

八月大風吹子古牙連綿之例

河海に出づれば是に波を吹くつる由歟書くる心はあふおそきに
 てうけしうつらひと明瞭なる一書あればよりいかりに
 出づるとさせうけんとせうあり御を今又秋あめて
 中よりうけおきまゝうけしむるなりと云ふ御りふかきあり
 愚直あふふ解りゆは秋の暴風よ真とうなりいづるをさふ
 面白き物語の多くて已と云はる西の文下の心は万々一切十成と
 誠必と記するなり必ありと物にふれかりとすなり難
 とするなりとまりに五原ありなり願遠に樂と悲俱するは流
 可付眼而已

河八月大风事

仁和三八月女日自卯刻暴雨自刻北風練後樹京中人象顛倒
迤茲十三八一自申刻大風折樹破屋

天慶五年八月十一大風暴雨如延喜十三八一

康保二八丈八丈風諸司并京中破損永祿元八十三酉刻
大風文城門舍以下京中顛倒之賀茂上涕社并石清水涕殿

東西廊極園天神堂凡一糸北邊々新田堂舎東西山寺皆顛
倒同二年十一月七日改元為正暦依去年八月大風已上何

うゝもあひいふやうなうゝ

中々の水色ふり候とあり

あゝうゝいふやうなうゝ

況や中々の水色の申れ切なりやうなうゝ

古今相恒長なうゝむれやけ

てこゝろにわゝさうゝれてゐたり

秋は病ふれれ吹く秋野はつねとありぬむ花しらけ

水色もいふとあり

中々の水色ふり候とあり

あゝうゝりの袖は

秘 箋付く

大空ふちやうりれ袖もいふとありぬむ花しらけ

秋の元め

秘 箋付く

春のむとゝいふとありぬむ花しらけ

うゝあゝいふとありぬむ花しらけ

箋 選

うゝあゝいふとありぬむ花しらけ

秋の元めいふとありぬむ花しらけ

疾の間の風をうゝあゝいふとありぬむ花しらけ

もれやうゝ

箋 選

りゝあゝの小萩

川を寄つて

箋 選

秋の元めいふとありぬむ花しらけ

あゝうゝいふとありぬむ花しらけ

うゝあゝいふとありぬむ花しらけ

川を寄つていふとありぬむ花しらけ

あゝうゝいふとありぬむ花しらけ

うゝあゝいふとありぬむ花しらけ

あゝうゝいふとありぬむ花しらけ

あゝうゝいふとありぬむ花しらけ

あゝうゝいふとありぬむ花しらけ

あゝうゝいふとありぬむ花しらけ

あゝうゝいふとありぬむ花しらけ

あゝうゝいふとありぬむ花しらけ

あゝうゝいふとありぬむ花しらけ

三

榮子

却
以
昨
君
此
以
子

大明石

源氏物語の如きものありけり

2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526

新名實

中 邦 公 卿 之 子

義
夕旁なり
飛

こころのち

小島子のおうりなうり

秘玄のこころ紙にあらはせし秘玄のこころ底をとりて

子成多(ととふゆ)す(ふ)く(そ)し(ふ)の(そ)り

ありふれたこの字をたて

以上

玉子のわさうふわな人

卷之五

五、
あけの夜
はるよりおそく
ふくと
梅の花
咲くころ

家
漢よりハ心のみこはつてあるのみを獨

くも梯とハグをぬきて穀をふち
和石 朱梯と書り

古今物語のうゝ小梯のうゝこゝ 已上筑河義親之

必
病の心より
一 古今といふ
ふ、穢の

わらさちくそそつろろかかみ

ふろふ

らるるるる

秘
宗とてなり

小
鎮
惟

足下此上之小之海也

正徳三年

前より此の地方にて前報つ

らそふと何

五

源の筆とぬへり音とと物とと

志々々々々々々々

上り女取公少々

ふくろうみちのきよ

いふは海を志すてあかき心とて世にうつりて又香にひかへ

實
必^レ心動^ニ如^ク
^テ代^リと智^カと云^フ定^ム
一^ノ語^ヲ

物とていけつと夕方のさひま

みのせうらうせうらうひらけてうしろを

美源 秘同

海の明石の那えれぬさうりぎのぬくうり

まゆみその後さくら

秘玄西此水
 子子子子
 或或或或
 玉玉玉玉
 水水水水
 といとい

王也 愛行不能正履
ハ從来シ累シ
夕 旁ハ儒者の紙志ヲハカフカウの如クアリ

みの成ふありまよりそつと結なれハ

六条院へ見参ふよりそふ条よりそふ内ゆゑに

まひとくわくめのもく 美二条より

うらけけり 夕音とけりけりなり

かろのり に友凡 秘凡なりと落ゆ

美玄寝友橋皮葺の孫凡と吹しそへに離凡霏祿也

あてり あてりけりけりけりけり

秘玄玄の心あり夕音なりけりけりけり

くもけりけりけりけりけりけりけり

そへて 秘二条より

美玄元橋皮葺の孫凡と吹しそへに離凡霏祿也

けり 秘二条より

秘権なり 秘二条より

いふに 美二条より

わけ 美二条より

内 秘二条より

内大臣のそへて

す 美二条より

あ 美二条より

わり 美二条より

う 美二条より

い 美二条より

い 美二条より

い 美二条より

い 美二条より

い 美二条より

い 美二条より

い 美二条より

い 美二条より

い 美二条より

い 美二条より

い 美二条より

花より多くいふは心とて
あそびに

ふくろんふて

美榮より歎す所

わづらふを

義
 云寬
 要卿記云八月酉子從昨日暮以今日兩不齊昨日申一

刻大凡自辰角次起寅二刻是此面就見景氣面也ト已上矣

中
 之
 所
 在
 也

風の吹くが

今更にわすれしをふしむる

義云ひろそくは心から作りとくを思ふに
あらず

えん
の
町

クニナリとは是変星（源の中）にけふのふれ

子甫

今

人の心をなやましてひそふ心

世儀は今とて凡の所を車の内吹入なり

道建中

新之元物産を以て一変として海を以てするなり

二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

花のう

義
子ハ玄孫ノヨリ又孫トノヨリ孫トトシ

ふのちこふ

必女星の所なり

五

養花要目

つるはさうちのいよき

夕帝れ記交里れろろ

ト
知
と
く
て
く
り
ま
る

んちのり

義源の字

おんちやうど

何
子
櫪

六 涼の寝衣下の順の階のふく

義云わさりののろなる一源をかうますとより此言櫛

必 少衣裏のあつて強ク面々衣裏とハス人々んといふ
うたふなり

笑うなり

うたふなり

必 此のあまふ人々んといふ

必 此のあまふ人々んといふ

いふなり

このあまふ人々んといふ

いふなり

必 此のあまふ人々んといふ

必 此のあまふ人々んといふ

いふなり

必 此のあまふ人々んといふ

いふなり

必 此のあまふ人々んといふ

いふなり

必 此のあまふ人々んといふ

いふなり

必 此のあまふ人々んといふ

いふなり

必 此のあまふ人々んといふ

いふなり

必 此のあまふ人々んといふ

いふなり

必 此のあまふ人々んといふ

いふなり

必 此のあまふ人々んといふ

いふなり

必 此のあまふ人々んといふ

いふなり

そらつふりしうさふといつう今中ふ西面てふれ
目れさうりそさうさう——況や此れわとの元すてき旁
まうさふさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
時首冠限方角下あてお遠すさうさうさうさうさうさうさう
於明やき——前ふわり

うり

ひのこさうふ

いさな

さう

さう

さう

秋感やう七葉のさうさうさう
おのさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

か

にふ

義にふにトさう

いとわられさうさうさう

秘風は吹らさうさうさう

吹らさうさうさうさうさう

おのさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

私に候三光自毫のさうさうさうさうさうさうさうさう

義

秘はあられさうさうさうさうさうさうさうさうさう

侍従のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

海は麝のさうさうさうさうさうさうさうさうさう

衆

衆に日紫苑のさう

さう

或

紫葉

さう

或は後

義田のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

秋の籬は白りぬさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

我之は以是合然如奉

ゆれさうさう

振舞

さうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

美

とふゆふの
秘丹少爺

秘傳小治政の巻

八
子
子
子
子
子

立
く
わ
る
と

夕暮れの中より

今更に

必
夕帝の依いゝみ城をもちて

新編
肝
心

[illegible]

氣を
つり
ぬ

義曰加うんのてをよむんをきよ

ふんわ神といふて心より能くなる所なり

ハ 海 能 爲 之

策

沛せりそとをいせとせ

秘
源の御
方格

宰相の心内なり

二
なり義

ハニク音のそりまゝ人あつて

三子

秘
ふくろ

これより先

策
必之きりく
まもりく
まもり
まもり
まもり

物といふ事と其のいふ事と

我々多量の多うもれおとみおひおとさ

いふ事さういふ事さう

秘玄紫と御ぬいあまのくさひくふ又搦てと痛ふといふ

美之此後中交此少多此幸ね内約をさう此は此所ふさう

うへへのききぬをいりてうへへききぬのうもあられとて

ねまうきくろきとさいていはいりくせあねふ

とまひては後者なりとてしるすことすといふは其の意を

秘之花鳥
鏡多是
是八品上
福壽如意
人々々々
上上
上上

私共等の爲に必要の爲に多少分同く此致とて用ひ

海小舟のり

翁同龢のてとえのりふ

南

中

葡萄のまとうつり糸のまわし

わさせゆ

ふりきり
ふりきり
ふりきり
ふりきり
ふりきり

義曰おふりりの能といふは活潑なる人

いづみんちうえ

只今の工を修め

唯今此水香佳

わくわく

源のり

女

文庫 女房 づり づりと

きよきん

源の味畧とて清りと

ふふふふふ

美
まゝとろろへ
とろろ
ろろ
ろろ
ろろ

新
う
2
あ
あ
う
う
あ
う
う

しよつとちや

養之胸中，與之成字。一、所介絕。

為

物のつらさ

或胸子

下
 海
 之
 中
 有

夕方此草をのせらるゝふゆふり

心よりいひおつてゆふわぬふふちうと

中ねのあさけを

和
屏
大
个
个

朝アサ間マ形カタチ

萬
且用
客役
萬

秘
多入源のやうに
義

あひまふしをあらはす

夕暮れとの境うらと秋の

ありとて源のおかた

かろく

人の心を度するは

あはれなるうた

歌
此
か
は
り
う
う

秘
萬心の到し

いづれに

源の海

ふふふふふふ

源の句

源の洞秋好申文の字の如のまなり

たふりあひなひくさそふ

是より源の中
文紙なり

義云うりひのきをふかぬいあうり（ふか）それをもんえ

一回也如愚ト云ハ歎シ

義之、心かかろう、わく心のとき、紙をわく、
に、くは、初義、文

又々一ふつとハ籐悟みふつとキ新のらゆ

新之此及之然也

中より入てどもどろりも

夕帝女との縁さそとんくふよりんハ所振ふ所也
ア〜くその〜くふよりふ〜とふ〜と海女令居る
山溪の麓所へおんとお居るえとふ也

ひとあひのちふい？ふねん

今夕の狂歌と涙の不意

ふんわりしてまわりまわす
ふんわりしてまわりまわす

かのすめみ

何彼

おくらあ

秘
字
義

いづかゝわん？

夢の舟

ふゆわいりあ

秘
海の心

姜源

ふものうら

異
尋中々の御方なり

よしのち

との内中の廊よりとりとりに廊を

おもしろいものですね

五
第
一

秘雲乃爲父との事

第二
 此後三上の内へ海へ入る物あり

出づといふを一人のどえうにえうをえう

ふさふさやうなふりて

明石の二浦のふりかへ

源

ふれつとほつと

五んごうあふか

各字のり一

۱۲۷

あつた

源のけ程のそへ
まゝ又此のけ程のそへ

といふに、着は、あとう

御さるゝ方の

友會海御少上右院身不也如心

そつて必之家中へおまうせし
仍割へ止めりしを

こころあはれ

二五九

玉子海

らゝゝゝゝゝゝ

源のかりとむうれわうりさるるなり
むうれ源れぬとむうれさるるなり

ふたつとて

玉うね涼水多ふれうね
義多ふれハ不徳也

新古今和歌集

かろく

玉つゆの月 秘

義云く、又、此ふ、又、さう、又、ハヤと

ひつる 後ハ
美 徳の字といふがふなり

いとうきり

義源あり

いよつとあれんやうなうん

源の河川をわたりてきりく餘りなりと云ふ

源のちをうたひて
あふをうたひて
あふをうたひて
あふをうたひて

[illegible][illegible]

いづゝ後氏をいひて後て所へ入るゝと云ふ事なり

1223

いふは外を求むるより内を求むるを

きよあへて
 必 けくひふと玉うねるあふに

[illegible]

五、三、二、一、
王、二、三、四、五、

河
兼名苑玄一名洛神珠 和名保く都波已上河

お玉うねり
かろき臺の吹てわをよ抱ててぬる

海狗丸

これかゝるに
箋曰 松竹梅を
よめる

あゝのわづらひふ
あゝのわづらひふ

入る人
和生

家内より此の如く。聖才堂
 へて。及。此。等。の。事。を。

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

[illegible]

け
 取
 ち
 り

秘ク事なり

夕音のよほむらとてあつとゆはるゝあはれおる
 いふてうゝあつとてあつとてあつとてあつとて
 まゝあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて

此子此聖朝命此子

くもあふみのまじりてふもあふより

おやとすたうわうとろろあしを物ちる夕暮るとい

夕音のふ寄　うゑたるり

義父兄少小家として名といふはあつてゝ

わしはふくしゅうのうそ

源玉々此祈と夕旁此

知よし

ふんふいとあそぶを解く

225

ふいふうふすもんと隆ふふあふ祈とうふあり

下を以てさへ

美祕云事

夢をたれつちとひとわ

あるうそ
異ク音のなり

は
く
は
て
ふ
と
し
と
は
ん
と
な
り
と
さ
と
さ
な
り

りてふくはふくはふくは

切の付
うり
ひきあれてそ
うあつ
なとて
ひきあ
り

知方よりとるに限りぬ故と云ひたる

うほろひそい
ほろのをりふわり

己亥年

ノ
兼
諾ノ
ノ
諾
日
本
紀

道之因之
因之
師之埋之
漢書之記下

卷之六

ねえしへてれをいとうなれんさるに。箋めとゆはアリテ
 預せぬ葉すうふ夕音れを中一あつとよりうあれあかじ
 して始りぬく海ありいそいまつちりとりわ、ゆるふ系
 流してむとそれとらふなりや夕音のを中一あ箋
 おきて別の中一あて承諾をひようふなりうー
 わるうとよう　夕音れを中一あくさぬくさひうふと
 うー　うううなりと　弟ふう地へ

女流は海をきよきとていふもすうさしれきてとてきき
 見ふに同胞同腹をきききききききききききききき
 但し物語あなうら一後をききききききききききき
 うわとうわのふもあうききききききききききき

義
 ク方のすゑに源より理をつけて詠み、ゆめも玉うつりてと見え
 るらんよ。此後ありと云ふより一もわづらひなくよ。あまのきとへ
 義云河海見本紀より一月後ありと書てうろくろくとよりなり。然
 一後の兄弟あり。此流をうけつた歩をととのさうこと後とも
 らいあるんよ。おあやうりもせうしとあらぬ。おぼろく
 此後の兄弟婚会と許すべしよ。おれそと古れるもの例としてよりよ
 不足撓網戒津世現いなり。て姉妹六親行嫁を慈想是
 菩薩波羅夷羅説津令格式定り。チヨリ。身父父子兄弟と還道諸
 人守る文。依り解るハ三世諸佛惡トヘル如クは物語師説定ス。
 テ自見セハ邪路入り。猶掌りてくらん
 眼目あり。雨なりい。秘
 りあふえり。義
 玉うつりたり

八重山原のさくらんぼうりやう病うりやう

山傾ハ玉ころのそよふかりひさきとありひさきと
 ふかりひさきとふさきとふさきとふさきとふさきと
 山傾ハ玉ころのそよふかりひさきとありひさきと

義
 玉うづれそふぬるなりよ玉うづれそふ山吹の心をなと
 わりさうふ人のこころあつひをせきありまう海女の
 心もあはけふふゆへまつらう花鳥よ知らせるを紙に
 おりよわくぬるうろたふれど　史
 まよぬ電燈の時空よわかれん
 うろたふれども中一みうふ申つたと夕暮れの中をゆく也
 義
 云はれたるいかに又この世はまじし極めたりといひ
 云はれようともよし

花よりそあれそまふ
むふへあふのふけあふそあふ物そとて
あふ花よりあふふとふとふとふとあふといふか

第五卷

いづれんぞあはれ

玉うねるうねるのいづれを

仰とハ
 子に
 幸い
 あり
 けり
 出
 り
 ぬ
 り
 と
 夕
 帝
 旦
 落
 花
 同

齊問

夢玄源のゆゑゆゑて立ゆりまふ所をともなはまうゝうり
 へんもせうてゐたといふ

るさみづらん風のきりぎりす女部をあらうてふ花こそあれ
 兼玄女部をあらうてふのつゆれを吹けと風は涼のもの
 はあゝさうかのやなればいづこかむらねぬくしと
 うゝゝとせぬよ　　玉うつればおぼえそけふもあはさう

ふきこゝろを流石のこゝろへぞううまきこゝろとなり
めきりのおろしん けいけつ夕方のゆき

源と玉鬘の娘神れなつきなうとらふ夕方のななり
うらうらとせうらうらと　　さつとつと　　わらうらぬれ

威
夕音ハ公王の海女へかたしうもさうの海女へさう
うりなうゝあうゝさうゝさうゝわうゝうゝ海女へさうゝ

夕音立よりぬく

ト疾ふやひあゝ六女帝心けきん
みそを解さう

下病ふさふさいゝるわゝさ風ふるわゝさのーきとなりあふ

あひてなほいきなりとくはとの下を

源はひてういさめいより六つき見ぬいづゝか

海に下病といふは下なり

老
源小亭いふをばとて

ふりしきる
義規

或
なうけ
^ニ_ハ苦竹なるものなりてあしぬゆへ川う

あふ所のちさうふく印をあらわしてめとふふとふふ

私にうふをう
う蜂のうといふうの

御うみあきすふりてあきといふ

應
 作
 と
 多
 り
 太
 い
 く
 め
 り
 て
 お
 め
 ぬ
 ぬ
 日
 祿

いゝとわさうん
夕旁れん

夕旁れ立の尻さぬらんをむくあつらあふさうのぬをさく
くいつりひり耳ふそくはゆふくそくくさくく夕旁の

ひん くの 水 へ
源 たり

朝寒

福ひこ
年預媛達年
花女
調行

中そひりうの
 へ云緒儘のりし
 秘枕あふう端そふ

舟枕^しあひ^にまう^つら^くめ^てき^くし^ら葉^二所^のあ^ての^あう^と

ふつふつとわきあふのうさふれ紙をまき
たり

ほろちひりくろそおろれとまじと

そめひのけのそめよ

春
 海を渡るひかりを
 待つ

い
ま
う
ま
の
よ
う
く
う
し
う
う

16
に
し
世
武
云
に
成
と

積善之

或
いづしうめうのり

中
の
き
う
の
う
い
源
の
う
の
う
の
義

御前ごぜんにふらんふのらん
秘ひ
こせしとり禁中み取りは

此取案も傍心せよとけりなり

萬花子

康保三年八月有前祓宴
 礼に海へ何とくかえんせらねとら

此の海
 多き秋
 あまのり
 前ふいつ
 とき
 此の海
 吹く

つとけさるる皆世の如く海に是杖のありあつて具

五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

源のなほ品しる墨と虚衣ありあや

[illegible]

秘、
かろ
花之
かろ

唐文苑類和名
唐文苑類和名

紀文
 卷八
 射惠詩
 之容
 從
 蘇方
 其書
 凡
 或
 爲
 之
 後

下云何也或云顯丈後人
以爲此字與二五近二
者舊文

夏の五節と玄菟の時、殷の金文より大畧同く、

秘義 賦之河の發秘目下と 同天曆神記經横ニ合並置下
机一脚之上如花文後廢義

これ花文とあるは義 花文のむとハ鴨頭義

花文及直花田ハ海方義 河云鴨頭草後花ト云七病義

中ねのこそやう秘 源の河

義云二藍の色年齢ニ從テ淡涼ある義

りつゝきつゝく義 又音ノかなり

くゆりゝきあ 夜ふれ世のうらひは雲わ房惟光、女命の

まへのめり

水云のぬるふあり秘 明水云れぬる義

又さり一人まの義

ささりぬるにあら秘 明水云れ世の西方ふ秘

ゆさりゝきなり秘 又音れ秘

みのいもかろゝ秘 水云れはあ秘

三條のたまれはあ秘

かゝにそあ秘

いひなれ秘 水音れ秘

うつゝいひ秘

あゝいひ秘

水云れ秘

この水秘

水云れ秘

水云れ秘

水云れ秘

水云れ秘

水云れ秘

水云れ秘

水云れ秘

水云れ秘

のもとへはぐさやうかく菖蒲の根お付若草より源氏女と云
 へばいふたり々み柄お付はみさよ草々ほみのりといひて
 のうもやうかく梅お付より源氏女すのゝなまめくは
 まれさすやうかくかろくお付より紙の文おたりといふと
 くてうめうめありあこのふちゆすてき物注ふようそへに
 うれえういたうかとのいふりいふ井おれ山候ありよ
 うるもちれと紙の文お付よりそめうめとて山候より
 付よりかき紙の文お付よりあはん今案定紙の文お付紙の文お
 似あひいふ候お付よりと夕景の文お付は必しと御へる
 何れそとてけふとていふうめお付へさといひてうめ
 無物治あり好みえたり

帝
 定北の所の北流ありこれ八旗の又ふ合する様み付くや
 仁棠の爲位を所蓋に付く事とると思ひてその第一及
 中ふは海に云れり此色ノ不第に付くるも其意は中
 し女を誦氏勢能人なりとす。

常々玉うへのはる藤柳萬蒲の根よつけ若菜源氏世に
 文へは文紙様あ付流るを白文は其の許人其の藤柳様あ付
 今夕旁れをとり海に実法を令れさうりれどもうひつさり
 かりとてさうりあつとて花をいはそをも付よ流るか
 心けり——とひまうつるやと已上箋
 さうりの名も 糸 夕さうりれ早下の根し 秘月
 夕旁の通名し 秘之早下るもの根し
 翁自必河海流て根か 右に夕さうりれは常さうりれ文のうへ
 一あり ねうりれさうりれ

秘 空 衆
 義 衆
 秘 空 衆
 義 衆

夕音をたり

うたのさうふといふれは

む
明石 昭憲と友よりうらやまの榮花をよめり

夕陽の空
 夕陽の空

さてもふくはなほ
びんばあやうき

ふくくちを海のあちりみ魚いそそをふとそ

笑ふも眼も夕暮と云ふふくなくへさるるを

お源氏の心をきくは源氏を愛する心なり

うゑをいふ

あけぬきしやうらん

夕方の夕に

二集文

おとすのり

夕霧の文（筆）

海寺子

三條より此よりなりと望む所あり

第百八十五卷

中々所ふつとありハ

二条よりてはつらふに足るる

たふとハあふおるつてゆつ能く

肉のふくらみ

何大長此母之柔文と夕るをひきく

明を久くくそつね

卷之五

必
玄升乃と久くえさふうと文のれを

いはいのほれがとふあうせん

必
內
大
片
詞
義

公の物とて

美夕旁に子紙姉
う

秘之箋云云
其の序

かきくけこ
さしすせそ

雲乃鳥のさふつかくのうをそそわくのふね

ふりい
やう
ま
り

礼部

夕旁ルイニとまらるゝ

知つてせらみ色にうて
清く

文江集

雲乃爲とくうとくふくもたまの福なり

いとぬてうたふ心そめ

石調子江

内大臣朝臣江志のり

養老ふてうとわ

正平先とて名なり

おれはすゝめとてを

心大長めまゝの取女をうゑいゝわゝるゝとて

のうらなひ

それぢやうしやうしやうしやう

遊具ふりやうしやう

新文御用大長の実れやうしやう
不審なりとの所へそれとての所へ
心なりまゝの所へそれとての所へ
ふりやうしやう

あつちやうしやう

あつちやうしやう

あつちやうしやう

あつちやうしやう

